今年６月下旬、バングラデシュ北部を襲った豪雨災害で生活の術を失った母子。国連 WFP は逆境に立ち向かう人々を支援しています。

飢餓から救う。未来を救う。

国連の食料支援機関

国連WFPニュース

Oct. 2020　Vol.63

国連 WFP 協会親善大使・竹下景子さんインタビュー
活動 10 年　逆境に負けない人々に勇気をもらった

「持続可能な開発目標」（SDGs：Sustainable Development Goals）は、2030 年までに達成すべき 17 の国際社会の共通目標をまとめたもの。国連 WFP は、目標 2「飢餓をゼロに」が他の目標達成の基盤にもなるとの考えのもと、その実現を目指しています。

国連WFP協会親善大使・竹下景子さんインタビュー
活動10年 逆境に負けない人々に勇気をもらった

2010年から10年間にわたり、国連WFP協会の親善大使を務めている竹下景子さん。セネガルやルワンダなど5カ国を視察し、現地の人々との出会いを重ねてきました。印象的だった出来事や、視察の苦労などを聞きました。

＜これまでの視察国＞2013年セネガル (E)(F)(G)(J) ／ 2014年フィリピン (D)(H) ／ 2016年スリランカ (B) ／ 2017年スーダン (C) ／ 2019年ルワンダ (A)(I)

(A)(B)(I) ©Mayumi Rui / (C) ©M.kuroyanagi /(D)(E)(F)(G)(H)(J) 写真 関口照生
(B) の写真の左端が 2016 年当時のニデルセン君

成長した少年の手紙に笑顔

—親善大使就任10年の節目を迎え、どのような感想をお持ちでしょうか。

竹下　あっという間だった、というのが率直な思いです。大使を拝命した時から「何年続けよう」という気負いはなく、その時その時できることをしようと考えていました。

女優の仕事は、非常に忙しい時期と「待つのも仕事のうち」という時期があります。スケジュールを調整しながら少しずつ飢餓について学び、視察に行くうちに10年を迎えることができました。

—視察で印象に残っていることは何でしょう。

竹下　最初に視察したセネガルで、栄養不良に陥った赤ちゃんが、乳幼児向けの栄養強化食品を渡されるとぐいぐいと勢いよく飲み始めたことです。「この子は生きたいんだ。食料が一つあるだけで、生き延びられるんだ」と、心の底から思った瞬間でした。

支援を受けて、すくすくと育った子どもたちの姿を見るのも嬉しいものです。2016年にスリランカを訪れた時には、8歳から国連WFPの学校給食支援を受けていたニデルセン君と出会いました。当時13歳でしたが、笑顔がかわいらしく勉強にも前向きで、心が洗われるような気持ちになりました。もちろん彼自身の努力も大きいですが、十分に食べて育つことが、こんなにも心身の健全な育ちにつながるのだと、支援の成果を実感できました。

現在のニデルセン君。怪我で手術をしてこのとき松葉杖をついているが、将来への希望は光輝いている。

—17歳になったニデルセン君から竹下さんへ、手紙と写真が届いています。

ニデルセン君の手紙（抜粋）

「竹下さん
2016年に会った時、あなたは私に夢に向かって頑張るよう、思いやりのある言葉を掛けてくださいましたね。
私や私の友だちは子どもの頃、朝登校すると空腹でめまいがすることもありました。給食のおかげで、勉強に集中できました。
私は今、レベルの高い学校で学ぼうとしています。大学に進み、会計士になって家族の世話をすることが目標です。」

竹下　（写真を見て）もうすっかり青年ですね！でも素敵な笑顔も、勉強して家族を助けたいというけなげさも昔のまま。国を支える人材に成長しつつあって、頼もしい限りです。

Photo: 文藝春秋

2013年、初めての視察で訪れたセネガルで、一緒に踊る竹下さん。

一緒に踊り、生きる実感を得た

—竹下さん自身が、視察を通じて得たものはありますか。

竹下　たくさんあります。厳しい生活に負けない人々のたくましさや、目をキラキラさせて勉強する子どもたちの様子に、いつも勇気をもらってきました。アフリカの人々は、ちょっとしたきっかけで踊り始めますが、彼らと一緒に踊った時も「生きているってこういうことだ」と実感しました。飢餓という問題の大きさに圧倒されそうになると、視察国で出会った子どもたち、お母さんたちの笑顔が思い浮かび、くじけてはいられないと思うんです。

—途上国の視察には、隠れたご苦労もあったと思います。

竹下　苦労というより、カルチャーショックでした。インフラが未整備で、ホテルの蛇口をひねるとお湯が茶色かったり、バスタブの底10センチで止まってしまったり…。お湯を使うという、日本では当たり前のことができない国も多いと、身を持って知りました。ルワンダの宿泊先は美しいホテルでしたが、部屋に蚊取りスプレーをまくと、雨のように蚊が落ちてきたものです。

スーダンでロッジに泊まった時には、夜中に部屋のすぐ外で、人のざわめきが聞こえてドキドキしました。翌朝、コーランの朗誦が聞こえてまたびっくり。現地の人が、外に自前のテントを張って宿泊していたのです。あの一夜は忘れられません（笑）。

国同士、フラットに助け合う

—10年の活動を通じて得られた、気づきなどはありますか。

竹下　支援する側とされる側は、逆転しうるということです。

私は子ども時代、援助物資の脱脂粉乳を飲んで育った世代です。しかし国が豊かになるにつれ、無意識のうちに「日本は支援国」と考えるようになっていました。東日本大震災で日本が支援される側に回った時、そんな自分に気づき、頭を殴られるようなショックを受けました。

視察国の中にも経済成長が本格化し、支援の「卒業」に向けて歩み始めた国もあると聞きます。国同士がよりフラットな立場で、お互いできる時に助け合うことが大事だと思うようになりました。

親善大使としての、今後の抱負を教えてください。

竹下　これからも日本の皆さんに、これまで視察した国の様子を伝え、現地の人々の生活を「自分ごと」として考えてもらうきっかけを作れればと思います。

また学校給食支援や自立支援は、生活を向上させ自立を促す大事な活動ですが、すぐには成果が表れず、支援のモチベーションを維持するのが難しい領域です。こうした長期的な支援の大切さも、繰り返し働きかけていきたいです。

—支援者の皆さんに、メッセージをお願いします。

竹下　国連WFPの活動に、いつも心を寄せて頂き、ありがとうございます。

皆さまからのご支援は、確実に成果につながっています。コツコツと継続することが、やがて飢餓ゼロという、大きな結果を生み出せると私は信じています。コロナ禍もあり世界の状況は厳しいですが、ぜひ引き続きご支援をお願いいたします。

世界食料デーキャンペーン2020

10月末まで開催中！

ゼロハンガーチャレンジ
食品ロス × 飢餓ゼロ

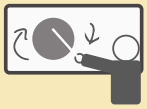
「3時のヒロイン」も応援！
動画やSNSで参加を呼び掛けています

https://www.jawfp.org/worldfoodday2020/

アクション例

残り物で料理

見切り品の購入



フードロスの講座に参加

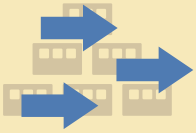
SNSで投稿

インスタグラム または ツイッター または フェイスブック または YouTube

ハッシュタグ
#食品ロスゼロアクション
#ゼロハンガー2020
#国連WFP

優れた投稿には賞を贈呈

寄付協力企業



120円の寄付

学校給食4日分に！

まだ食べられるのに捨てられている「食品ロス」、これが日本でどのくらいの量か、ご存知でしょうか？ 2019年、国連WFPは420万トンの食料を人びとに届けましたが、日本ではその約1.5倍の610万トン以上が食品ロスとなっています。これは日本人1人1日当たり茶碗1杯分のご飯を捨てている量に相当します。

また世界でも食料生産量の3分の1が捨てられています。一方、地球上では6億9,000万人が飢餓で苦しんでいます。

食品が捨てられると、生産に使われた肥料や水、運搬等のエネルギーがすべて無駄になってしまうとともに、温室効果ガスの排出など、環境負荷にもつながります。近年日本でも異常気象による災害で多くの方が影響を受けていますが、これは国連WFPが支援を行う国々でも同様です。そしてその被害は甚大で、気候変動は飢餓の主な要因の一つとなっています。

毎日十分な食事をとりたい、子どもたちに健康的な食べ物を与えたい。これは私たち誰もが抱く共通の想いではないでしょうか。しかし世界にはそれを叶えることの出来ない人たちが余りにも多くいます。

国連WFPではこの状況を改善するため、10月末まで「ゼロハンガーチャレンジ～食品ロス × 飢餓ゼロ～」キャンペーンを実施しています。食品ロス削減のためのアクションをSNSに投稿することで、途上国の子どもたちに給食を届けることができます。皆さんも是非、参加してください。

身近にできる国連WFP支援

レッドカップキャンペーン

㈱イズミクリエーション、㈱村内ファニチャーアクセスが新たに参加しました。売り上げの一部は学校給食支援に寄付されます。

㈱イズミクリエーション NEW
カラーブーツ
スターブーツ
ミニブーツ

㈱村内ファニチャーアクセス NEW
レッドカップマーク付きの家具、ご不要家具お引き取り運搬サービス

10周年を前にリニューアル

飢餓から救う。未来を救う。
WFP 国連世界食糧計画

レッドカップキャンペーンのロゴおよびウェブサイトをリニューアルしました。ロゴには現在の国連WFPのスローガン「飢餓から救う。未来を救う。」が入ります（対象商品によっては引き続き従来のスローガン入りのロゴが使われています）。

ウェブサイトは、キャンペーン対象商品がカテゴリーごとに掲載されるなど、より見やすくなっています。是非ご覧ください！

https://www.jawfp.org/redcup/

最新の情報は… WFP.JP　WFP_JP　メルマガ HPトップページからも登録可　ご寄付は…

国連WFP
https://ja.wfp.org/

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい1-1-1 パシフィコ横浜6F
0120-496-819
受付時間 9:00～18:00（通話料無料・年始を除く年中無休）

国連WFPニュース
Oct. 2020　Vol.63

Special Report（スペシャルリポート）

サバクトビバッタが人々を食料不安へ追い込む。

新型コロナ禍中の大量発生により、国連WFP活動地域でも深刻な影響が懸念される事態に

飛行して移動するサバクトビバッタの群れ。　Photo: FAO

東アフリカ、中東、南アジアで、脆弱な人びとの食料を脅かすサバクトビバッタ

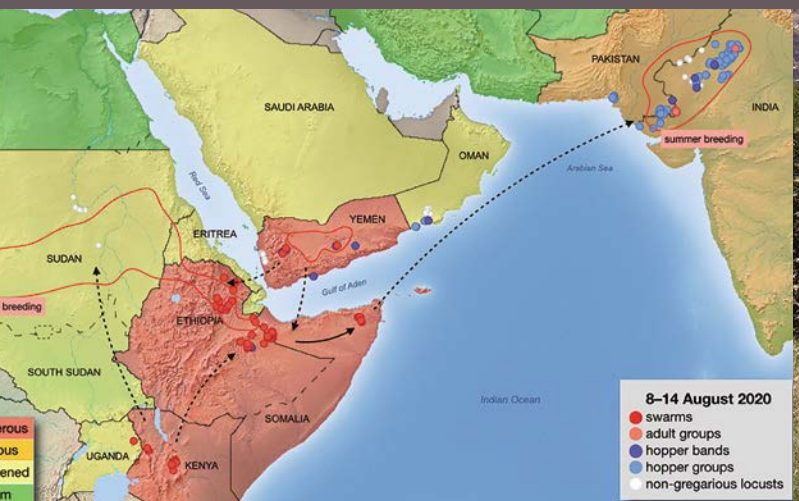
体長5センチほどの大きさにもなるサバクトビバッタは、世代交代を数か月に1回行います。2週間ほどで孵化し、1カ月程で成虫になることから、短期間のうちに更に大きな群れを作る事ができ、多くの地域で農作被害を出す要因となっています。1日あたり自らの体重分の作物を餌とする成虫になると、1日で128キロメートルも移動する事もあり、1平方キロメートル＝東京ドーム約21個分の広さあたり8千万匹もの成虫が群がった場合、人間35000人分に相当する量の作物を消費します。更に雨季やサイクロンなどによる湿度上昇がサバクトビバッタの繁殖を促し、穀物栽培などの農業や餌となる草地を必要とする牧畜業に影響を及ぼしています。

アラビア半島付近で発生し、昨年の6月に「アフリカの角」と呼ばれているソマリア、エチオピア付近に到達したサバクトビバッタは、最近では中東や南アジア地域など広範囲にわたって作物栽培や食料供給に影響を及ぼしており、食料不安が現実のものとなってきています。サバクトビバッタによる食料不安に対応するためのコストは、バッタの拡散を事前に防ぐためのコストの15倍かかると予測されています。

国連WFPによる取り組み

国連WFPは新型コロナの影響により、東アフリカで2020年の年末までに、73%増となる4150万人が食料不安に陥ると予測しています。サバクトビバッタによる被害が更にどれだけ影響を及ぼすか、いま評価を行っているところです。既に6月より、国連WFPは東アフリカの各国で、新型コロナとサバクトビバッタ双方の影響を受ける脆弱な人びとに対し、食料支援や栄養支援、農家のレジリエンスを高めるための支援を行っています。日本はとりわけ中心的な役割を担っており、ケニア・ソマリア・ジブチ・ウガンダでの国連WFPの活動に対し、政府から拠出を行っています。ソマリアでは日本からの支援により、サバクトビバッタの被害が深刻な地域で28000人を対象に食料購入のための現金支援を行っています。また国連WFPは、各国政府によるサバクトビバッタの監視活動のために車両を提供しています。

サバクトビバッタの移動状況　©FAO



群れの中を走る現地スタッフ　Photo: FAO

『FAOは、国連WFPとも協力し、サバクトビバッタが食料安全保障に与える影響を調査し、最適な対応策の実現に取り組んでいます。』国際連合食糧農業機関（FAO）駐日連絡事務所広報官の田村萌々花氏に、現在の状況などについて聞きました。

放置は食料不安へ繋がる

ケニア・ソマリア・エチオピアなど東アフリカ地域からイエメン、更にインド・パキスタン国境付近にも移動範囲を広げているサバクトビバッタの群れは、各地域で食料安全保障を脅かす複合的要因の一つとなっています。農作物が食い荒らされるなどの直接的な被害に加え、新型コロナウイルス感染症による移動制限なども重なり、食料不安へのリスクが高まっています。東アフリカ地域では2019年の時点で2800万人近くが急性食料不安の状況にありましたが、今回のサバクトビバッタによる直接の影響からは、最大250万人が急性の食料不安に陥る可能性があります。800万人の国内避難民と400万人の難民を抱えるとされる東アフリカ地域ではこれから雨季に入ります。バッタの繁殖が盛んになる前に防除・駆除を行うことが重要と考えています。

現時点で「大発生（upsurge）」レベル

FAOではサバクトビバッタの群れの発生状況について3段階で定義しています。

発生：特定地域内で幼虫や成虫が群れを形成し始めた段階。

大発生：幼虫や成虫の群れが長期間、地域全体に渡って繁殖を繰り返している段階。

蝗害：大発生を制御できず、個体数・群れの規模の拡大により、群れの発生が一定期間を超えて発生する段階。複数の地域で同時発生した場合は大蝗害。

東アフリカ、特にケニアでは70年ぶりの「大発生」となったことから、当時の記憶がある人々が少なく、早期対策を講じることが出来なかったため今回、大きな被害となってしまいました。西アフリカ方面も懸念していましたが、2004年の大発生の経験に基づく早期の対策で、今のところ大きな被害を未然に防ぐことが出来ています。

成虫より幼虫の群れを優先的に駆除

「バッタ駆除」と想像すると成虫を駆除するイメージですが、サバクトビバッタの成虫は飛翔可能な移動性の高い害虫であるため、地上にいる、成虫になる前の幼虫の段階から、事前に被害拡大を防ぐための防除を優先的に行います。各国政府や地域のバッタ対策機関と協力しながら、FAOは農薬散布による駆除を発生現場で支援します。大規模な群れに対しては、ヘリコプター等を使用した空中散布も行います。

ITを駆使したバッタ監視体制

新型コロナウイルス感染症による移動規制がかかる中、FAOは駆除活動以外にITを活用した監視活動や情報収集を積極的に行っています。FAOは対応計画の策定支援、現状のモニタリングや越境情報の提供を通して、現地のパートナー・政府や自治体が実施する対応策を支えています。各地域で必要な支援内容や農地への被害状況などの情報を世界中から収集し、早期の分析も行っています。地域住民と連携し、GPS搭載アプリを活用したバッタ発生地の特定も現場で行っています。

今後の見通しについて

FAOはサバクトビバッタの駆除を最優先事項の一つとして対応に当っていますが、今のところ収束の見通しは立っていません。ケニアではいったん制圧の目処が立ちましたが、今後の降雨次第では再び大量発生する可能性もあります。過去には、数年に渡り発生が続いたこともあり、長期戦を覚悟して取り組んでいます。FAO駐日連絡事務所のウェブサイトでも情報を提供していますので是非ご覧ください。

http://www.fao.org/japan/portal-sites/desert-locust/en/

噴霧器（スプレー）による防除作業。 Photo: FAO

現地での調査の模様。 Photo: FAO